

薩摩の兵兒謠一たび頼襄の詩に入りしより天下これを傳誦せざるものなし其の辭は「肥後の加藤が来るならば焔硝着に團子まうそ夫でもさかすに來るならば首に刀の引出物」と云へる謠にして「團子まうそ」とは即彈丸を以て膳羞に充るを言ふなり當時加藤清正封を肥後國に受く島津氏これと境を接し戒心無きと能はず因りて寨を出水郷に築かんとす乃ち此謠を製り衛夫をして唱へしめたる所なりと云ふ此謠の外にも亦「我は備前の鎗刀おもひまはせば研ぎはしや」と云へる謠ありて佩刀を抜き舞踏するを以て常とせり傳へて言ふ島津氏既に款を豊臣太閤に納れて國中無事なると數年朝鮮の役起るに及びて士卒の刀或は錆を生せし者あらんとを恐る故に此の謠を製り刀を抜き舞踏せしむ實はこれを檢するなりと是も亦以て其の武を尙ふの風を見るべきなり其他猶「降らばふれつもらばつもれ松の雪ゆきよおれたる松が枝やある」又「おはれ我が身舟ならばおもふ君さまうちかせてあらしやア無くとも我が宿へ」又「最早おちやるか御江戸へおちやる弓もつよかれ矢も利かれ」と云へるが如き數闋ありと聞けり凡う古より當時の事傳へて童謡俚歌に存する者少しとせず徒然草の野槌に出でたる一里間町

の謠は以て鎌倉府の嬖人を知るに足り尤草紙に載せたる赤き物盡しの歌は以て聚樂第の時粧を觀るに足れり織田右府の淺井氏を圖るや城を虎御前山に築きて以て小谷城に逼りし時織田氏の兵常に謠つて曰く「淺井が城はちいさい城やア、よい茶の子朝茶の子」と淺井氏の兵これに答へて「淺井が城を茶の子とおしやる赤飯茶の子で強茶の子」と云ひ又「信長殿は橋の下のごう龜ひよつと出て引こみ無よと出てひこむも一度出たら首を取る」と云へしとて今猶近江國の童謡に存す今其國に「浮世といへばあさましや多賀の久徳は親流す新莊駿河は子を流すどかくおしきは我が命」と云へる俚歌あり此は當時新莊駿河の淺妻城に居り久徳左近太夫は多賀城に居りしが左近太夫は母を質とし駿河守は子を質として淺井氏に屬せしに後叛きて六角氏に降れるを以て淺井氏これを怒り二人の質を城下に磔にせしに由りてなりと是等の類は或は以て史傳の闕を補ふに足るべし又其時事に關係なきもの一二を附するに當時の事を以てせんに仙臺舊藩士の舟を海上に泛ぶるに當りて舟子必らず拔錨の謠を唱ふ其詞は散樂中の狂言の戯に稱して語りと云ふ者に異ならざれば想ふに應に足利氏の世に行はれし所謂幸若の曲な

るべし「初春のよきひおとしのさせながは昔小櫻となりぬべしさて又夏は卯花の垣根の水のあらひかは秋になりてその色はいつも軍にかちいろの紅葉まがふ錦かは冬は雪氣の空はれて胃の星のさくの座もはなやかにこそ緘毛の思ふ敵を打糸や我が名を高く揚卷の弓矢の囊又納まりて太刀は箱をば出さじと富貴御世とはなりよける」と云へる是なり其句に寓するに戎器を以てせるも亦巧麗なりと謂ふべし此等の語は俚なりと雖ども猶は上國の詞に近し陸中國花卷驛の鎗躍の歌の如きに至りては知らざる者必らず當に其の何言ざるを解すること能はざるべし鎗躍は或は呼びて奴躍と云ふ刺溜くして髻低き者腰に長刀を横たへ槍を舞はして舞蹈するを以て名づけたるなり、其詞よ曰く「ちーごーぶのてへつから星のねやぢがすばぬけて火事のたまごをぐはぢやりふんぐはした」と唱ふ「ちーごーぶは地瘤の義にして山を謂ふなり「てへつ」は天邊にして山頂を言ふ「星のおやぢり」星の爺を言ふ月の隠語なり「づばぬけ」は高く抜け出づるをいふ「火事のたまご」は提燈の隠語にして「ぐわぢやりふんぐはした」とは割然として踏破するを言ふなり全章の意は月山上に出づるを以て提げ來れる燈を踏破せりといふに

過ぎず其艱澁解すべからざる事かくの如し或は以て僻地の言語を徴するも足らんか

●勝川春亭細君に謝す

初代勝川春亭は中古屈指の浮世繪師にて特に武者繪を以つて妙手の名を博したり春亭は單に畫事に長じたるのみならず其爲人極めて洒落にして時々花柳に流連するともありし由なるが一日家を出で四五日間流連して吾家に歸らんとするに定めし細君の激怒に觸れんことを恐れ何がな工夫を運らして之を避けんとを思ひ遂ひに途中より小兒の手遊に用ゆる階梯一挺を買ひ來り吾家の敷居へその階梯を架け頻りに登る爲しつゝあるを女房は見咎め「良人何をか戯れ給ふ氣違ひ染みたる業をせず早く内へ入り給へ」と言はれて春亭頭を搔きつゝ「何うも敷居が高く此階梯では登り切れぬ手を引き給はれ」と眞顔に云ふにぞ女房も餘りの事に可笑さ堪え難く良人が數日の流連に腹立ちしこと打忘れて格子戸打ち開らさ出で迎へりとなん

●鞭撻に代るに新聞を以てす

千七百九十六年カセライン二世に次で即位せる露帝ポール、ペトロヅツチは太子の

りし時四歳の頃より内閣員ベッシテセツを師とし讀書算術を學べり太子は頗る我儘にて中々に師訓を聽入るべくもあらざりしが高貴の人なれば之れに鞭撻の責罰を加ふるともなり難く甚だ困難せしが、侍講ベッシテセツは遂に下の如き一方案を考出せり其は侍講の毎日「宮廷新報」と題せる一種の新聞紙体のものを印刷し其中にの皇子が前日中に爲せる我儘の行狀を一々明細に記載し又前日の日課稽古中の勤惰をも詳細に掲出せり侍講は太子に向て此の新紙は毎日歐洲の各國の朝廷も悉く配布するものにて各國の朝廷は太子の不行狀、不勉強等を一々熟知すべきが故に須らく他國君臣の笑を招かざる様御勉強あるべしと懇切に告げたりしかば太子は大に恐れ爾後次第に行狀を慎み日課を勉勵するに至りしとぞ、然るに實は右の新聞は獨り太子に示す爲めにのみ唯一枚を態々摺り立る迄にて元より世上に流布せしむる者にあらざりしなり

●雄辯家の戦慄

古來雄辯を以て鳴り響きたる辯士にても何卒此の辯論を善くしたし間違ひぬ様したしと危ぶむの心より演説の際或ひは身体に戦慄を生じ又は其の他何等の現象を示さ、

る者は殆んど稀れなり今ま其の特に著明なる者を擧げんに古昔希臘のシセローは演説を始むるの際全身に戦慄を生じ其の戦慄する有様は聽聞席よりも明らかに見分け得る程なりしと云ひ中世宗教改革を以て有名なるルーザーは晩年に至るまで説法壇に臨みて常に戦慄を生じたりと云ふ又米國メーン州の元老議員にて雄辯家の譽れあるフラ井の如きも余は演説するの前には必ず危懼心の爲めに戦慄せざるとなしと陳べたり英國の政黨首領にも此類の雄辯家少からざるが中にカンニングは大切の演説を爲すに方りては万一の過失を危ぶむが爲め先づ戦慄を生じ然る後漸く論歩を進むるを得るなりと自ら語りたり又辯論場裡の名將と聞へたる故の大宰相ロード、デルビーは演説を始めんとする間際に喉と唇の乾くとは恰かも今ま將さに死刑に處せられんとする罪人の喉と唇との如しとて自己の演説する時の模様を陳べ且つ雄辯家アルソンの事に付て同人は通常の宴會席上にて演説するにも其の初めには多少の戦慄を生せざるとなしと云へり又たロード、ソングーストが演説の始めに戦慄するとは其傳記中に明らかにして史家マコーレーが屈指の雄辯家なりと稱賛したるチルニーの如きも議院にて論辯せ

んとするの際には必ず兩脚自から戰慄するを覺へたりと

●位爵を見ること糞土の如し

日耳曼にて著名なる詩人シラー氏の嘗て絶世の一大詩篇を時の皇帝に奉り爲めに陛下の知遇を辱なふし爵を賜はりて貴族の位に進められたることあり然れども氏が性福落跌宕高爵を見ること恰かも糞土の如く貴族と交際することなきのみならず他人に對して己れが貴族たることを曾て告げたることもなし去れば親朋知縁と雖ども氏が貴族たることを知るもの絶てあるなし氏も亦意を介せざるが如く幾んど打ち忘すれてありしが一日友人の來訪せるとき氏は近作を示さんとて堆積の草稿類を取出し搜索する内に反古紙の内にフト授爵の勅書の見當りければ氏は心付き友人に向ひ君は未だ余が貴族なることを知らざるならんと勅書を能くも示さず他の反古紙と與に草稿筐に投じつゝ又草稿の搜索に餘念なかりしと

●政治家小説家を弄ぶ

英國の政治社會に一時名聲を馳せたるセリダン氏は一日無聊を感めんと辻馬車を僦ひ

龍動の市街を彼地此地乗回りありしが計らずも友人なる小説の大家リチャードソンの來るを見かけ退屈の折柄なれば一番リ氏に戯ふれ呉れんと竊かに思案を運らし手を擧げてリ氏を壓さリチャード君同車し給はずやと呼かくれば彼方はセ氏の胸中一物ありと知る由もなければ異議なく同車して四方八方の話をせしむセ氏は急に話頭を轉して一議論を提出しリ氏の意見を叩けり元來此の兩士は親密の間柄なれば何事に就ても毎に議論の合ひぬ性質なれば彼れ是れ言ひ合ふ内兩人とも烈火の如く激昂し往來の人の何事ならんと寄集ふ程なりしがセ氏は此處不好き機會なりと聲荒らげて曰く君の議論の何時もながら不道理極まる僕は斯る僻論を聞く耳は持たぬ斯かる人と同車するさへ汚らはしと怒れる顔色にて急ぎ馬車を下りぬリ氏は獨り車中に止まりセ氏の術中に陥りたりとい心付かず却て彼れを逐ひ拂ひたりと云はぬ計りの顔色にて心地よげに「ヤア君は負たなく」と呼はりたり斯くて相別れセ氏は家に歸りリ氏も暫時して馬車を下り車丁に賃錢を拂はんとせしに車丁は何卒先刻の御客様が四時間餘乗したる賃錢も頂戴いたしたしと云ふより氏は初めてセ氏に戯むられたるを知り覺ゆる吹さ

出して一杯喰いせられたりと吐やきぬ

●鬚を切れとの命を受ざるべし

稀世の人物が落命の際、種々奇異なる舉動をなすことは萬國共に同一なり英國史上に有名なる政治家トーマス・ムアが國事犯の罪にて斬首の刑に處せられたる時、氏は頭を斷頭壇上へ載せけるが鬚の餘りに長く垂れ下りあるに心附き僧手に向ひ何卒刀を下すとき注意ありて余が鬚に觸れしめざる様せられたしと請へば僧手は打ち笑ひ君は今將さに頭を失はんとするの場合ならずや些々たる鬚の事を心配するも何の益かあらんと言けるにムアは笑ひながら言はるゝ如く余に取りては甚だ些々たることなれども子を取りては大切の事にあらずや子は政府より余が頭を斷れとこそ命せられたるなるべし余が鬚を切れとの命は必らず受けざりしならんと言ひしに僧手は返へす言葉はなかりける

●コレリツジ兵營に在て奇才を現す

英國著名の詩人コレリツジ氏年尚若く未だカムブリツジ大學に在りし頃大學の近傍に

氏が戀慕せる一佳人ありけりコレ氏見て美となし折々言を通ずれども佳人黙して應せざりしかバコレ氏は痛く失望して遂に大學を退き龍動に引籠りしが時恰も徵兵募集の時にて氏はエリヲット、ライト、ドラグーン第十五聯隊の徵募に應じ試験を受しに年齢体格共に差支なかりしかば氏はシラと偽り名乗つて兵籍に登録されぬ扱て氏が聯隊に編入さるゝや嘗て夢想せざる骨折仕事多ければ私かに嗟歎しつ彼のシイザア、レラダス、エパミノングス何人ぞや彼等武勳を以て萬世に名聲を垂ると雖も豈に亦斯る初心のこのあらざらんやと耐忍事に當るの決心をなしたりしが更に又思らく我れ能く此辛勞を耐ゆることを得るも反つて吾が文學の才を損することなしとせんやと斯て勞役を忍びて武技を練習せしが固と斯る事に長處なければ何事も同輩に比して甚だ拙なく殊に騎馬の術に至りては何程習ふとも練熟せずシラ程しばし落馬するものは世間に類なかるべしと營中隠れなき評判となりたる程なりし又コレ氏は性來甚だ事を面倒に思ふ人なれば自分の馬さへ洗掃することを欲せず「馬は何故自ら水に入りて浴し自ら振つて其毛を洗はざるや斯く爲さば毛色に天然の光澤を生ず可きに」と常々吐けり然れど

も營中素と森嚴なる規則ありて之を怠る者は嚴罰に處せらるゝが故にコ氏獨り怠るを得ず毎日洗馬の事を欠かざりしが終に一策を案出し同輩に賂ふて爾來此苦勞を免かるゝを得たり其賄賂は誠にコ氏に取りては容易のものにて則ち同輩が情人に贈る所の詩文を代作することにてぞありける又たコ氏は營中の諸事に拙劣にして同輩の笑を招くこと少なからざりしかども同輩は氏が巧みに談話して鬱を散せしむること妙なからざるを以て皆な深く氏を愛し苦役は成るべくコ氏に課せざる様に取計ひぬ、一日氏は番兵の役を命せられ一日營前に佇立して在りたるに一人の將校馬に跨り大聲に詩を吟じながら門に入るものあり其詩ハギリシヤ語にてありければコ氏谷楚の感に堪へず其吟聲に耳を傾けしが確かに希臘の詩家ユリピデースの詩篇中の一句なりしコ氏は己が番兵の地位なるをも打忘れ失禮ながら貴官が今誦せられたる句中に誤りありと覺ゆソハ斯くくになりと指示し且つ今貴官が誦せられたる句よりも却てソフクレースの詩篇に面白きものありと告げられたれば將校は番兵に希臘の詩篇に通曉する學者あるは如何にも不審と打驚き其方は何人なるやと問ふにコ氏謹んで貴官の隊伍にある下卒なる旨を

答へり將校は尙も心得難き事と急き役所に到り今在りしことを物語り彼れは何人なるやと尋ね問ふに人皆曰く彼れはシラと云ふ兵卒にして營中に有名なる落馬家なり思ふに彼れはラクスホールド若くはカムブリッジ大學よりの到來物なるべしと其の後ち取調を爲して其實を得たれば或る役人は氣の毒と思ひコ氏を擢て、病室の看護夫に命じぬこの新職はコ氏の爲めに幸福なるのみならず病人の爲めにも幸福の事となれり其は何故と云ふにコ氏が面白く巧みに談話するにより病人は日の長きをも知らず皆な病苦を忘れて耳を傾くるを以て醫師の治療にも優して効能ありければなり或日コ氏は例のごとく數多の病人を集め頻りに談笑してありしが適かに戸を開て入り來る三人の紳士(コ氏の友人) あり物をも言はずコ氏が手を取りて戶外に連れ出だし三人共に曰くシラ君定めて辛らかりしなるべし吾々の君の爲めに五百圓の免役料を納め了りたる程に今より再び舊の詩人コレリツジ君となり給へど猶何くれもなく周旋し呉れしかばコ氏は思ひがけなく再び廣き世の中を見るとはなりたり

●人造の美人

宇宙間の萬物の成立を疑ひ遂に自家の成立すら疑ひ古代の哲學者が百年の苦辛を以て研究したる理屈を總て排斥し去り別に一機軸を出せる近世哲學の鼻祖デカルト氏は常に一種の説を有せりそは如何と云ふに凡そ獸類の如き下等動物は目能く見、耳能く聞き口能く食ひ凡て人類と同一なる機關を具備するも雖も素と精神を缺く所の動物なり故に若し精巧なる技術を以て之れを作るときは決して作り得難きにわらず特り下等動物のみ然るにわらず人類と雖も夫の小兒の如き若くは瘋癲白痴の如き知識もなく精神も確りならざる者人爲を以て製作し得難きまわらず又之れを以て下等動物位の動作を爲さしむることも出来難きにわらずと氏は熱心よ之れを唱へたるのみならず曾て和蘭陀にありし時非常の財貨を抛ち非常の苦辛を費して時の名工を集め一個婢妍たる少女を作らしめたるに誠に上出来にて進退動作共に常人と異ならざりければデカルト氏の我子の如く愛しフランシインと名を命じ常に座右に置いて玩弄せり來訪の客人杯は人造なりとは露知らず全く子が息女なりと思ひ丁寧に挨拶するものもありしと云ふ斯てデカルト氏は和蘭陀を去り舟路本國獨逸に歸ることとなりしかば氏は少女の途中に破

損せんことを恐れ之れを箱に入れて船長に托し此の品物は破損し易きものなれば大切に取扱ひ呉れよと特別の依頼をなしたり然るに船長は何となく之れを見たくなり四邊に人の居らざる時を見済まし私かに箱の蓋を取去り中を覗はんとせしに忽ち婢妍たる美女の躍出せしに船長はアハヤと驚き熟々思ふ様人間社會にハヨモヤ斯る尤物のあるまじ何にしる是れハ妖魔の類に相違なしと輕忽にも合點して持主に相談も遂げず例の少女を捕へて之れを海中に投せり斯くと聞きてデカルト氏は大に驚き恰も愛兒を失ふたる如くに歎き悲めりとなん

●一書の價二千圓

「ジャステス、オフ、ピース」(治安法官)と云へる書は英國の文學社會に誰れ知らぬものなき高名なる大篇なり其著者は文壇の老將と聞ねたるバルン氏なり氏が此書を著はせし頃は英國の北方に當る僻地に住し數年の勞を積んで初めて著作を終りたるを以て之を出版せんと龍動の都に上れり然るに初めて上京せる事故事を商量するの知人さへなければ旅宿の主人は書肆の紹介をば托せり主人は豫て知る書肆は此事を話せしに

兎に角一覽の上にてこの事に従ひ草稿を渡したり然るに一兩日を経て此書ならば百圓以上にては買受け難しとて草稿をば戻しぬバルンは意外の廉價に失望し以來は斯る論文を作る可らずとつぶやきたり此頃アンドロウミラルと云ふ書肆繁昌を極め時々出版する書籍の内にバルン氏の文章を賛稱することありしかば氏は之れに心付き此度の紹介を求めず直ちにミラルの肆に至り著書の事を相談せし書肆は鄭重なる取扱をなし且つ曰く此草稿拜見の間數日間御預け下されたし夫れ迄は拙宅に御泊り下されど請ふにぞ氏は其言に任せたり扱てミラルは斯る書を判するの眼識なければ草稿を持して懇意の法律家に到り其判定をぞ請ひたりける法律家は一讀し終り其議論の高尙にして文章亦雄健なるに感服しミラルに云ふ様此書ならば一千圓出されても御損はあるまじとミラルいよく驚きて翌日バルンに向ひ貴君の御思召では代價何程の御積なるやと問へばバルンは先きに一書肆が附けたる意外の廉價に落膽してありければ余の思はくは言ても相談になるまじ實は先きに一書肆に見せたるに意外の廉價に踏つけられ寧ろ出版を見合せて火中に投ずる方快よしと思ふたる程なりと言ひければミラル推し返して

其書肆は何程と申ましたと問ふにバルン少しも隠さず僅かに百圓なりと云ふ然らば千圓にては御相談ななりませんかと云へばバルン首を掉つて少ない相談にはならぬと取り合はざればミラルも餘儀なく然らば此書は私が頂戴するとなし金圓は何程にても御望に従ふべしとて即時に三千圓を渡し爾後バルンが著作ある毎に其書の好し悪しに拘らず二千圓の金を贈り終に五萬五千圓の額を爲すに至りたり然れどもミラルもバルンの書を出板したる爲め非常の繁昌を加へ終に英國第一の書肆となれり

● 詩人ポープ。ウォルテールを打つ

佛國文學の泰斗と仰がる人なれど其の内行に欠點多きウォルテール氏の英國著名の詩家ポープと兼て別戀の交際ありければウ氏が英中は折々ポープの門を叩き遂にはポープの家人とも親しき問柄とはなれり或る日のことウ氏はポープの不在なるを知りつゝ其の家を訪ひポープの北堂なる人に面會し扱て謂ふ様御老母の御機嫌を損する儀にはあれどお話し申さずては叶はぬ事こそあれそは他にわらず此程御子息が出板さるべき詩卷を拜見致せしに中に御老母を冷罵せる様の思構少からず若し此の詩卷にして公

けになるに至らば御老母の爲め甚だ悪しかるべし生も御別懇の事故何とか書肆に相談を遂げ出板を見合はさせる様取計ひたし些少の金圓さへあれば此の談判は容易に纏まるべしと存す若し御同感ならば生に御任せあるべしと信切らしく云へば北堂は大に驚ろき其の仔細を能くも聞き質さず何分宜しき様御取計ひ被下たしと若干の金を取出して渡せばウ氏は後日の發覺を憂ひ更らに云ふ様此事は極めて秘密に致し置かざれば成就覺束なし御子息にも必らず御口外下さるなと堅く制して首尾能く己れが悪計を仕遂たり、扱てウ氏の此の成功は慣れて程立たぬ内再び同様の計を用ひんとせしが老母と談話最中折あしくポーブは外より歸り來り北堂の顔色甚だ不愉快げに見ゆるを訝かり母人には何か御心配の事にもあるやと問ひかくれば老の一轍に怒りを帯びたる老母はウ氏が二度までも話したる事の大畧を述べてポーブの不孝を責め詰れば傍に坐したるウ氏は今更何と詭言を云ふ違もなく満面に朱を灑げばポーブは聞き了りて憤然として大に怒り持ち合はせたる杖を以て打てかゝるをウ氏の邊で避けんとして誤りて椅子より落ち纒かに罪を謝して逃れ去れり

●ヒヤ／＼の失敗

シエリダンのハマルクと時代を同じくしたる辯士にして且有名なる才子なり或時下院に於て演説をなせしに矢鱈無性にヒヤ／＼と號ぶ一議員ありてシ氏は大に其演説を妨害されたれば氏は心中憤怒を勝ねども色も出さずいざ討論となれる時シエリダン又立わがりて一人の反對黨員を批評して謂らく彼れ論者は悪がたを氣取ると雖ども實に白痴に扮するの才もなし天下また斯の如き痴鈍なる愚人ありや又斯の如き悪々しき白痴ありやとこの時早く彼の時晚く前の議員は思はず大呼してヒヤ／＼と云へりシエリダン乃ち議員を顧みて曰く惟はざりき白痴の人其所に在しまさんとはと終に滿堂の喝采を得たり(案するに英語の Hear (謹聽)は Here (茲に)と音相通す)

●賊詩人を切かす (東西一對の談)

松尾芭蕉翁或年彦根に遊びし途中曠原に通りかゝりたるに忽ち林中より裸体の一巨賊白刃を閃めかして翁を迫る翁賊を顧み汝衣服に乏しくば之を與へんとて悉く衣服を脱棄たり既にして翁彦根に留ると數日に及び一少年來り嚮きの衣服を返して曰く前日の

賊は犬神五郎なる者にして衣服を吾に托して言へるに彼れ累歳賊を以て業となせしが未だ前日の貴客の如く威容ある人を見せ復た其芭蕉先生たるを聞き慚愧に耐へず幸に謝して衣を還し呉れよと托せりと翁莞爾として一笑し賊も亦可憐生なりと云へりと、西洋にも亦是れと一對の佳話あり一夜盗あり英國に著名なる詩人モントゴメリイの邸宅に忍入り氏が嘗てセツア非ルド伯夫人より賜はり窃かに家の寶として珍重せる墨壺を竊取せり因より氏は當時に隠れもなき高名なる詩人の事ゆゑ翌朝此事直に新聞紙上に上り到る處ろ大評判となれり賊も餘りの評判に耐り兼ねけん左の書簡を添へて贓品を氏が許に返還せり

謹啓野人が前夜貴宅に忍がり候節は未だ先生の世間に隠れなき高名の詩人に在すことを露知り不申、如何にも回顧しへば野人が未だ幼少の砌り母より貴名を承りし事も有之斯る御家ども不存忍入り候段如何にも慚愧の至に御座候只今盜品御返還申上ひ間渉入手可被下且つ不敬の段は何卒御海恕被下度願上候頓首

千八百十二年三月

バルミンガン府に於て

無名氏

●ウオルテール鷲を愛す

佛國の文學者ウオルテール氏は種々奇癖を有したる中、鷲を愛する一種の奇癖を有せり氏は曾て一の大鷲を購ひ得て之を愛すると大方ならず金銀を以て修飾せる大籠を作り之れの中に放ち間暇さへあれば之を弄して無上の歡樂となし居りしが一日快晴、乗じ之を庭園に放ちたるに如何はしけん鷲は一脚を痛く傷ひ幾んど癒ゆべくも見ぬざるに予氏は大に之れを愛ひ急に醫師を聘し之れが治療を托したるに醫師は氏が之れを愛することの非常なるを知らず一見し終りたる後微笑しなから何心なく到底治療の道なしと答へたるに氏は憤然たる顔色にて禽獸の病すら治するを知らざる醫師は如何で人類の疾病を治し得べき宜しくドクトル醫業を廢すべしと一叱し其後は醫師をも招かず百方心を碎いて自ら治療の法を案じ幾んど著述の業までを廢するに至りたれども鷲は日一日より衰弱の有様を呈するよぞ氏は最も不快の事に感じ兼て短氣の性質なるが上よ更に一層の甚しきを致し格別の事にもあらざるに婢僕を叱責すると數々なりしかば婢僕も幾んど之れに耐へ兼ね或日氏が外出せる折を窺ひ鷲に近づき汝あればこそ我々

まで主人に叱責を蒙るなれとサンムに打擲しければ驚は愈々衰弱を來し其故にや翌日終に籠中に斃れたりされば主人ウ氏の愁歎は譬ふるに物なく幾んど數日間は飲食もせざる程なりし然るにこれに引換へ婢僕等は更らに愁容なきのみならず窈かに厄介物の死に失せたるは我々の幸なりと賀ふ事氏の耳に入りければ氏は憤然として怒り遂に多年其家に仕へたる一人の忠僕に暇を與ふることとなりぬ一家の人々も餘りの事に思ひ折もあらは諫言して其の勘當を詫びんと待ち構へたるに或る日氏は最も心地よげに酒飲みてありければ氏の愛嬢某は氏に向ひ百方僕の罪を謝したる後其勘當を許さんことを請はんとせしが氏の事驚に關するを聞くや忽ち憤然たる顔色にて其事ならば決して宥赦の叶はずと到底聞さ入るべくもあらざるにぞ其後は且らく此事を云ひ出づる機會もなく時日を送り一年を経過せる後漸やく其の機會を得初めて僕の罪を謝して其勘當を許すこととなりたり

●詩人グレイ伯爵夫人の賜を受く

「慕邊懷古」と題する一篇の長詩を作りて雷名を宇内に轟かしたる詩人グレイ氏が未だ

カムブリッヅ大學の聘を受けず天外淪落の塞措大たりしと一日友人を伴ふて龍動の市街を散歩してありしが或る店頭に衆人の群集して山を爲すを認め何事にやと共に立寄りて見れば古道具の糶賣を爲すにぞありける氏は物を買ふの意なけれど立止りて店頭に堆積せる古器を見るに、よしある人の拂物と覺しく非凡の什器多きが中に最と奇麗に飾立てたる書架を認めたり氏は且らく之れを目を奪はれ更に其架上に列ねざる書籍を詮索するに孰れも皆な佛國文學大家の著書なるにぞ欲しきこと限りなく試みに其代價を問ふに一百磅(我五百圓)なりと云ふ氏は其價を貴しとは思はざれど當時斯る大金を所持するの時にあらねば伴ひたる友人に向ひ私語しながら切りに歎息してありける然るに其聲や他に漏れ聞ゆけん傍に在りたるノルサムバルランド侯爵夫人は秘かに氏の友人に就きたり今書架の價を問ひたる人は誰れ人なるやと問はせけるよ有名なる詩人グレイなる旨を答へたり兎角してグレイ氏は己が寓所歸りけるが間もなく戸を叩いて來り訪ふものあり何人ならんと戸を開けば一人の男が前刻欲しく思ふる書架を車に載せ來りたり氏は不審に思ひ其來意を問ふにノルサムバルランド侯爵夫人の僕

なる旨を告げ懐中より一封の書状を取り出し書架に添て恭しく之れを差出すを受取りて披き見れば曰く

肅啓從來妾が貴著を讀んで無量の愉快を感じたる御禮として粗末ながら物品差上候間不腆を答めせ御笑納被下候は、本懐の至に奉存候拜具

ノルサムバルランド内

グレー先生

● 簡單なる書翰を作るの難し

世の人或は長文の尺牘を認めんより簡單なる尺牘を認むること甚だ容易なれと思ふもあらんなれと簡單にして事情を能く盡したる尺牘を認むる程難きことはなし或人曾て英國に有名なる學士パスカル氏の許を訪ひ氏の友人に宛てたる添書を請ひたることあり氏は恰かも著作に従事してありしかは之れを五月蠅思ひ只今は甚だ繁忙にて迎もお需に應し難し明日再び來られよと斷りたり然るに依頼せる人曰く明早朝は先生の添書を得て是非先方へ参り度に付切めて二三行位の單文でも只今御認め下され度しと強

て請ふにそ氏も辭するは詞なく、やをら筆を執り走り書きに看るゝ書箋二三葉も認め尙は完結せざる模様なるに不依頼者は戯れに氏に向ひ先生御多忙の御様子故簡單の添書を願ひたるに斯く長々と認め給ふは如何にやと問ひ掛れば氏は漸やく認め終り「然れば今多忙にて簡單なる尺牘を認むるの暇を有せず」と答へたり

● 白髮三千丈演説を聴くに因りて長し

佛王路易十二世一日鏡に臨み頭髮の斑白に變したるを見て驚くこと一方ならず歎して曰く是れ豈に朕がこれまで議院に臨んで長き演説を聞きたるが爲めならざるを得んや別けて夫ノヨリ——(當時著名なる政治家の姓名なるべし詳らかに知るを得ず)の演説は殊に朕が頭髮を斯く白くらしめたりと覺ゆと云へり白髮三千丈因愁若許長とは支那の詩家より聞きたれと白髮三千丈演説を聴くに因りて長しとハ初めて之を路易王ふ得たり

● ニュートン翁の逸事

ニュートン先生と云へば小學の穉童と雖も能く知る所の著名なる理學者なり先生晩年

に至るも理學の研究に刻苦して怠らず書齋にあるの間は知己朋友の來訪と雖も謝して之を接せず一日先生の親友にて當時著名なる理學者某氏は何れ先生と商量することありて門を叩けり某「先生は御在宅なるか」僕「在宅なれども只今讀書中なれば必ず御面會を御斷り申すべしと思はる」某「イヤ拙者は先生と御懇意の者なれば拙者参りたる趣き御通じあらば必ず面會せらるべし」僕「御懇意の御方にては書齋にある内は決して御面會仕らずよし御來駕の事を通じました所が讀書中は意を其邊の事に留めません故又到底無益の事と存じます最もモハヤ午餐の時刻にも近ければ其内には食堂へ参るべし暫時食堂にて御待受なされては如何」某「然らば其事にせん」と伴はれて食堂に入り待つと一時間餘になれども先生出で来らず其内自鳴鐘十二時を報じ来りたれば當家の料理人ども覺しきもの食物を入れたる蓋物を携へ来りて之れを某氏に供へたり某氏は之れを喫し了りて元どのまゝに蓋をなし之れを傍ら置き喫烟してありけるに漸くにして先生出で来り先生「イヤ是れはお久しぶり先御話を致す前に失禮ながら食事を仕るべし」と傍へ据置きありたる蓋物は客人に供へたるなりとも知らず自分の前に引き寄せ急ぎ

蓋を取りて食はんとし中を見るに一二の牛の骨を遺すのみにて外に何も無かりしにぞ先生は已に我が食ひ盡したるなりと合點し某氏に向つて「イヤ多忙に紛れて甚だ思ひ違ひをなしたり僕は已先刻午餐を済ましたるにて御覽の如く殘肴のみ此に在り」といへば某氏は失笑し「イヤその器にありし肉は只今小生が頂戴せしものにて先生の膳に供へたるものゝあらず」と云ひしかば先生も初めて心付き一笑したりとぞ

●ミルトン、ゼームス二世を罵殺す

ゼームス二世として英國史上に隠れもなき帝王の未だ東宮に在せし頃一日當時詩壇の老將たるミルトン翁（翁壯時明を失す故に人呼ひて盲目の詩人と云ふ又たチャールス一世の虐政を惡むで盛んに自由論を唱ふ故に人又た呼ひて詩壇の自由家と云ふ）を訪ひせ給ひ四方八方の談話ありけるに東宮は偶と翁の盲目なるに心附き戯れに宣まはする様貴殿が斯く失明の不幸を招きたるは余が家嚴（則ちチャールス一世を指す）の事を惡様に書きたるを以て天帝貴殿を罪せるにやあらんと翁は聞きも終らず若し殿下の言の如く不幸を以て天刑となさんには殿下の大人の御最後に就ては何と覺すやらん小

生の唯だ明を失するの天刑を受けたるのみなども尊大人は頭を失ひ給へたるにあらざるや(チャールズ一世暴虐を極め人民の弑に遭ひたるを指す)と憚る氣色もなく言ひ放ちしかば東宮は返す辭もなくソコソコに辭し去られたり

●耳かき羅馬法皇

一英人伊太利に赴かんとて佛國を通過し豫て交を結びたる學士ウォルテール氏を訪ひ種々談話の末小生伊太利に滯在中是非一たび羅馬府へ赴く心得なり同所は御承知の如く珍らしき古器物の類少うらざる所なれば歸國の時には何か購ひ來りて御土産に差上ぐべし何れにも御望の品あらば遠慮なく申されよといへばウォルテール氏それの辱けなし何卒羅馬法皇の耳を切りて御持參願たし(宗教革命以前迄は道理社會に言論の自由なく如何なる名論卓説も教旨に背くものは異端なりと排斥せられ羅馬法皇は幾百千萬人の學者名士を嚴刑に處したりこれウ氏の言ある所以なり)と云ひける斯くて右の英人は伊太利に着して右の羅馬府へ赴きたる時一日法皇クレメント十四世に面謁の序ウ氏の戲言を傳へしかば法皇は微笑しながら御歸國の初にはウ氏に予が言を傳へら

れよ我々の最早耳を持ち申さず(言論の自由大に開られ羅馬法皇最早道理の曲直を判断するの權を有せざるを云ふ)と答へ得て妙といふべし

●俎魚

獨逸有名の醫學士にしてヘール大學の理科教授たりしジャンカーは専ら解剖生理の教授に従事し時ありては死体を解剖するとも少からざりし一日解剖用に供すべき二個の死体を得たり其死体はいづれも刑律に觸れて絞罪に處せられし者にてありしなり其日は既に薄暮に近かりしを以て明日を待ち解剖せんものごと例に依り解剖室に入れんとせしが生憎鑰の見えずして室の戸を開くに由なければ死体をば一の大囊に納れしまゝ寢室に隣れる一ト間の中へ運び込せつ適宜の臺に載せ置きたり

斯くてジャンカーは晚餐も了ましたれば獨り書齋に入りて翌くる日教授すべき學科の下調に取掛り課書を讎するに餘念あらざりしが初夜も何時しかに過ぎ二更も何時しかに過ぎて今は三更近くなりたりけむ四隣は闐然として人語を聞かず家族の人々も己が

し臥床に就きてジャンカーは伴ふものは只だ其身の影あるのみ一種の燭影は青白き
焰を吐きて物さびしげに耿々たり

乍まちにしてジャンカーの耳に上りし一種の物音なり人の歩するにも似たり人の佇
すむにも似たり仔細に之を聴けば其物音は正しく死体を入れ置きたる室内に在りジャ
ンカーは少しく疑ひを生ぜり「此の深夜に當りて家族の彼室に入るべき謂れなし」ジカ
ーの又心付けり「恐らくは猫の死体は觸れたる者ならむ死体を入れし時に當りて猫の
彼室に入りしに心付かざりしものなるべし」

事に慣れたるジャンカーは無氣味ども思はざるにや右手に手燭を照らしながら件の室
に至り見れば怪むべし死体を覆ひたる藁の中程は切れ居たり之を視ては稍や心に驚き
たれども其容子の測りかねてや更に左手を指のべて藁の上より探り見るに確かに二個
ありし死体の一個は見えずなりにきジャンカーは此光景に怪みもし驚きもし四邊に心
を配りて室内を見廻はしたるが戸締も緊く爲しあれば何者にか盗去られたりとも思は
れず餘りの不審さに今の小氣味悪くも不圖納戸の方を打見やる目先へ朦朧として映じ

來りし物体あり抑も人なる耶抑も鬼なる耶

物に動せぬジャンカーなれど目先に映じたる此の物影は痛く驚かされたりと見ゆて
足も動かす其處に立止まれるに彼れ小暗き室隅に蹲まれる一物体も亦た鋭き眼光を
ジャンカーの舉動に注ぐもの、如し其体は或は左へ或は右へ或は高く或は低く動きな
がらも其眼は瞬きもせず此方を見詰むる体なりジャンカー手燭を伸出せば彼は次第に
其体を縮めジャンカー手燭の手を引けば彼は次第に其体を伸ばしジャンカー一步を退
けば彼の一步を進むる状あり愈よ見れば愈よ凄し流石のジャンカーも恐怖と疑惑とに
心を亂され其足は何時ともなく後歩を始めて早や室の入口まで身体を運び去れりジャ
ンカーの眼は彼れ物体の上を離れず彼れ物体は此方の燭影を便りつゝ歩み出したる
然なきだに夜深く森々として物凄き比なるを斯かる意外の光景に遇ふては誰れか非常
の恐怖を起さるべきジャンカーは事の仔細を思慮するの遑もなく遽たしく室の戸
を閉ぢ背後を見返りさす手なる燭火を吹消して忙ぎ其寢室に入り臥せり謂へらく「夜
明けなば詮議せむ便宜もあるべし」

暫くして蹙然耳に上りし音は紛ふ方なく人の入来りしなり最ども冷かなる手もてジャンカーの足を掻い撫で悲哀なる聲にて「乞ふ宥るせ」「乞ふ宥るせ」と呼覺す様子に彼の室に見し一物体に相違なし怖はさは怖はし去れど逃れんやうもあらねばジャンカーは見るどもなしに燈影に透かし見るに身には衣をも纏はず憔悴はてたる一個の少年なりしなり人品骨相敢て害悪を爲すべしとも見ゆざれば其心の落付くに連れて頼かに思合せし所あり「彼れは絞罪に依りて一時絶息したるもの、其急所を外れたるが爲め蘇生したるに疑ひなし」ジャンカーは斯く思定めて「御身は何故なれば絞罪に處せらるゝ程の罪惡を犯したるか」と問掛ながら其家人を呼起さんどせしに彼れ少年は愕然として「貴所之家人を呼起して予を殺さんとするの意なるや貴所にして若し予の一命を助くるを吝むなくば予は貴所が家人を呼起さんど望む何んとなれば予よして若し衆人の目に觸るれば再び絞罪に處せらるゝの不幸を蒙むるべければなり」と一向に哀を乞ふて止まず

此哀れむべき一語を聞きジャンカーは家人を呼起さんどもせず有合ひし衣類を與へて

辭徐か又問掛けたり「予は御身の如何なる罪ありて刑せられしかを知らんと欲せり」少年は力なげに答へたり「予は曾て徴兵となり隊伍の中に加はりたれども予の休質の之れに適せざるのみならず予の資性も之れを好まざれば機會に乗じ兵營を逃走して或る知人の許に身を潜めり其知人は後にて身を托するに足らざる人物なるを悟りたるが之を悟りたる時は既に予の罪狀の發覺したる後なれば不幸にも遂に國法に問はるゝに至りしなり然るに予の命運未だ盡さず幸にして今や蘇生するに至れり予は貴所の枉げて此場を見逃されんとを望むものなり

此時はジャンカーの心中既に恐怖の念も去りて愛憐の情頻りに動き如何にもして之を助けやらんと思ふ者から斯る大罪を犯せし者を其家に留むるともならず去りて迂濶に之を放ち遣れば再び囚はれて罪を糺さるべきは必定なり此上只だ彼れをして安全に其身を保たしむるの道は人知れず今宵の中にへールの都府を落延びて外國政府の治下に立たしむる一事なれども都府の街端には數箇の見張所ありて容易に見逃すべくもあらざれば思慮深きジャンカーも如何はせんと思ひ惱みて暫らくは少年を見詰むるの外

なかりき
 暫らく思案に沈みたるジャンカーは良ありて其身の醫師なるを想ひ得たり此の醫師
 と云へる肩書こそ彼れ憐れむべき少年を助け得さすべき便宜ともなるべけれど兎かう
 工風を凝しつゝありしが卒然として少年に打向ひ「予の御身を救ひ得さすべし去る代
 り暫時の間御身の予の命のまゝたらざる可らず」
 少年はジャンカーが救ひ得さすべしと云ひたる一言を聞くと同時に始めて生ける心地
 やしたりけむ唯々として俯拜む外には他念なく其爲す所に任し居たる程にジャンカー
 は手早く身支度を整へイザとばかりに戶外へは連れ出たりジャンカーは足を早めて歩
 み出し少年は其後に従がひながら街端まで来りし頃は夜の一時過ぎなるべし往來も已
 に絶ぬ街燈の影はの暗く家々いづれも寝鎮まりし中に獨り輝やける燈影の間はずして
 見張所なりと知られぬ
 見張所の役人は今しも通り過ぎんとする兩人の影を認め案に違はず誰何したりジャン
 カーの殊に急げる体にて「予は病家に赴むくものなり予が豫ねて治療し居たる病家よ

り危篤に迫れりとの報又接したるなり」といふ顔を見れば「ヘル市中にも隠れなきジ
 ャンカー國手なり之に隨へる少年の食客の供に立しものと外見受られねば見張所にて
 も何事なく通行を許したり
 此の難所を通抜けて今は心安すしと思ふに付けジャンカーは少年に低語たり「ヘル
 の都府を出づる以上は最早別に氣遣はしきともあらず去りながら此國に在る間は決し
 て油断すべきに非ず夜明けぬ中に一哩も遠く落のびて早く外國の治下に入らんと御身
 が畢生の大事なるべし」斯く低語示めしながら旅資として若干の金を與へ身の上行末
 の事など辭短かに心添して別れを告げたれば少年の喜こびは大方ならず「再生の恩は
 身を終るまで忘れず」と厚く謝しつゝ何處ともなく闇に紛れて落行さけり
 其後十二年を経てジャンカーはアムスターダムに赴くべき用事ありて此に逗留し居た
 りし際土地の銀行より受取るべき爲替金ありたれば今日は之を受取るものと銀行
 へ赴きしに同じく銀行へ所用ある者と見ゆ衣服風采の目立まで立派なる一名の紳商
 は纔かにジャンカーに後く来て馬車を驅らせ入來りしがジャンカーを見るより其辭を

卑ふして「失禮ながら先生はへール大學の教授たられしジャンカー國手にては在さずや」と問掛けたりアムスターダムには深く見知りたる人なきジャンカーなれば件の紳商の最と懇ろなる辭遣ひは頗ぶるジャンカーをして疑ひを生せしめたるも黙止べきにもあられねば不審ながらに「然り予はジャンカーなり」と答へたり紳商は更敬禮を表したる辭にて言出せり「唐突に失禮なる申條なれど予は先生の予と食事を共になさんことを望むなり」ジャンカーは尙ほ不審ながらに答へたり「姑らく貴命に従ふべし」

ジャンカーは心ならずも紳商と共に馬車を驅りて誘はるゝまゝに但有る一街に到れば輪奐の美を極めたる宏壯の建物あり疊みなす煉瓦は日光に映發し磨き上げたる御影石の玻璃窓と其光を争ふて燦爛人目を眩するばかりなり紳商の頼がて馬車を此の建物の前に着けさせジャンカーを伴ひつゝ壯麗なる一室へ請じたるは其自宅なりと知るべし麗はしき細君は着飾りし數名の子女を引連れて出で來りジャンカーは向ひて恭しく初見の禮を叙づるなど總べてジャンカーをして意外の想ひあらしめざるいなしジャンカーは心に思へり「彼れ紳商の厚く予を遇するのみならず彼れ夫人まで彼れ子女まで

誠實に予を禮遇するは何故なるかアムスターダムの人士は外客を愛するの癖ありと見ゆたり去るにても彼れ紳商が予の名前を知りたるも不思議なり」

ジャンカーは夫妻の待遇にて饗應の食事も了まし更に誘はれて別室へ移りたるに此處には多くの美術品とも飾付け古代の花瓶に見事なる花卉を挿みて異香室内又馥郁たり紳商は一段辭を恭しうして問へり「ジャンカー國手、貴下は予を見知らるゝか」ジャンカー「更に見知りたりとは思はず」紳商「貴下は定めて見知らざるべし予は能く貴下を記憶せり嘗て記憶せるのみならず十二年間嘗て貴下の恩賜を予の心に忘れたるとわらず貴下は實に予が再生の恩人なり予は十二年前貴下の一室に於て蘇生したる當時の一少年なり貴下の情に依り貴下の恵に依りへール郊外にて貴下と別れたる後は和蘭へ逃がれて暫らく逗留せるに運よく是なる大商店の手代となり貴下が臨別に際し諭されたる教訓を守り身を慎しみて其業を勵みしに數年ならずして大いに主人の信用を得加之ならず主人の娘の眷愛をも受けて間なく養子となり其跡を譲受くるに至りたれば今は當府中に於ても暗からぬ身分となるを得たるも偏に貴下の賜ものなり予は貴下が

此屋をも此身をも此妻と此子女をも皆貴下の一身に附随するものとして永く此に逗留せられんことを切望するなり」

紳商のこの物語りにジャンカーも始めて「扱ては然にてあしりか」と思合はせ往にし夜のとほも語り出で、笑ひもし喜こびもし互ひに興じ合ひ覺ゆす時を移せしは不思議なる再會といふも愚かなり

今古雅談終

今古雅談正誤

丁數

二ノ四行

足下の首

誤

七ノ十一行

フイアライ、クイーン

二七ノ七行

ヒーコンスフ井ルド

二八ノ五行

ステイル夫人はタレイランド氏の妻にあらず

二九ノ三行

英王チャールス第一世

三八ノ五行

文學社會

三九ノ二行

亞細亞全洲

四一ノ三行

タクビイ侯

同ノ五行

セルデン氏

四五ノ十二行

げんげ草

五三ノ七行

佐野の渡の假名

七三ノ三行

英國著名の記者ヘンリー、メイ、ン氏

七八ノ七行

英國中世の記者

八七ノ七行

サゼイ氏

九四ノ十行

ダライト、ウエストルン、レールウイ、

九五ノ七行

ゲーテイ氏

正

拙者の首

フエアリー、クイーン

ヒーコンスフ井ルド

チャールス第二世

學者社會

亞細亞大部

タクビイ侯

セルデン氏

げんげ草

佐野の渡

英國著名の記者ヘンリー、メイ、ン氏

英國有名の著作家

サゼイ氏

ダライト、ウエストルン、レールウイ、

ゲーテイ氏

同ノ八行	ニイハル	ニヒヤル
百四ノ四行	マダム、ダレビイ	マダム、ドゥプロイ
百二十二ノ五行	鎌倉	修善寺
百二十六ノ二行	ザエーク、ド、ガイヌ	ザエーク、ド、ギイヌ
百三十二ノ十一行	學士アツトマン	アツトマン
百三十六ノ三行	タウ井イ	ダ井イ
百四十二ノ四行	吉良上野介義英	義央
同ノ五行	官兵の爲めに	人の爲めに
百四十四	義英	義央
百六十六ノ二行	雪ハ花より猶日	雪ハ花より花多
百八十二ノ十一行	庶道	衆道
百八十四ノ五行	護門の一書生	護門の一書生
百八十七ノ三行	又翁の家	蜀山翁の家
二百三十四ノ七行	演劇俗傳の辨	俗傳の辨
二百六十九ノ六行	江風漁火に作る	江風漁火
三百四ノ四行	スキレル氏	スキレル氏
同ノ六行	アライ、ステュアルトと云ふ小説	メリイ、ステュアルトと云ふ院本
二百八十八ノ八行	陳の宣帝	陳の宣帝
三百三十五ノ九行	田代歌右衛門	中村歌右衛門
三百三十三ノ七行	字義の辨	字義の辨

明治廿五年九月一日印刷 (今古雅談) (定價金參拾錢)
 同 年九月九日出版

著作者

堀 誠

發行者

金港堂書籍會社

代表者小石川區原町百三番地
 金港堂書籍會社副社長

三宅米吉
 東京市日本橋區本町三丁目十七番地

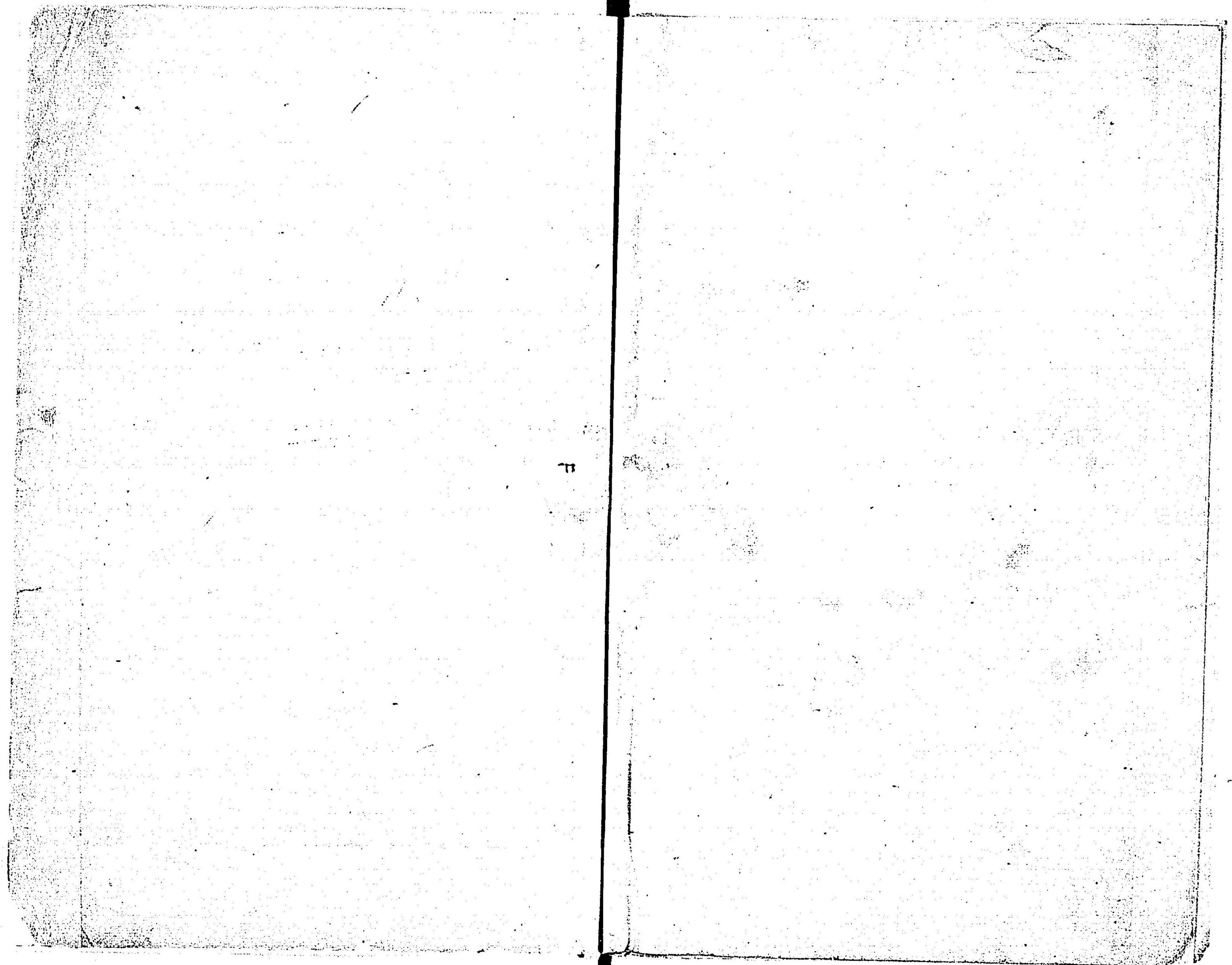
日置九郎
 大阪市東區南本町四丁目

金港堂
 宮城縣仙臺市國分町五丁目

野口幾太郎
 東京市日本橋區吳服町
 萬里館

版權
 所有

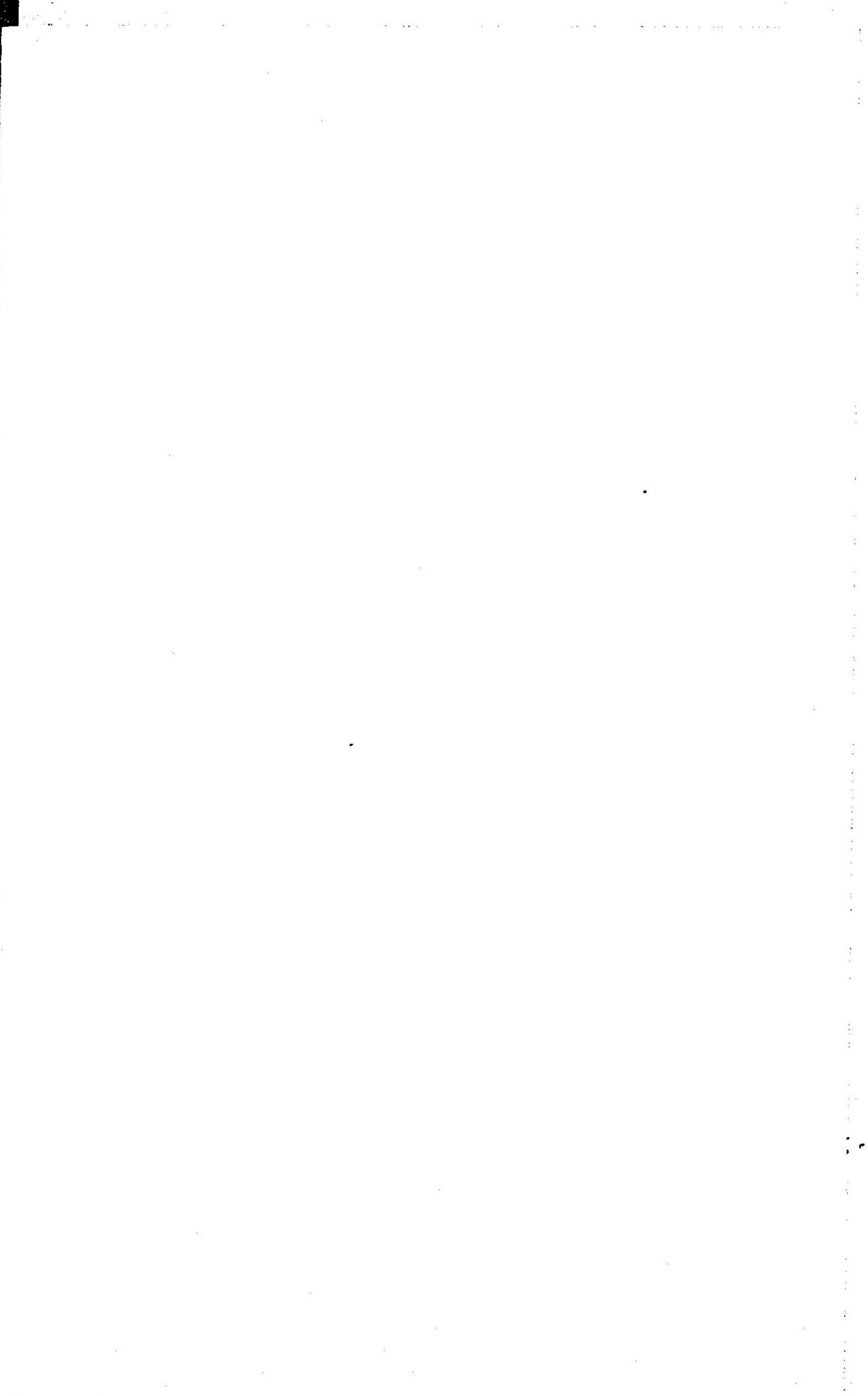
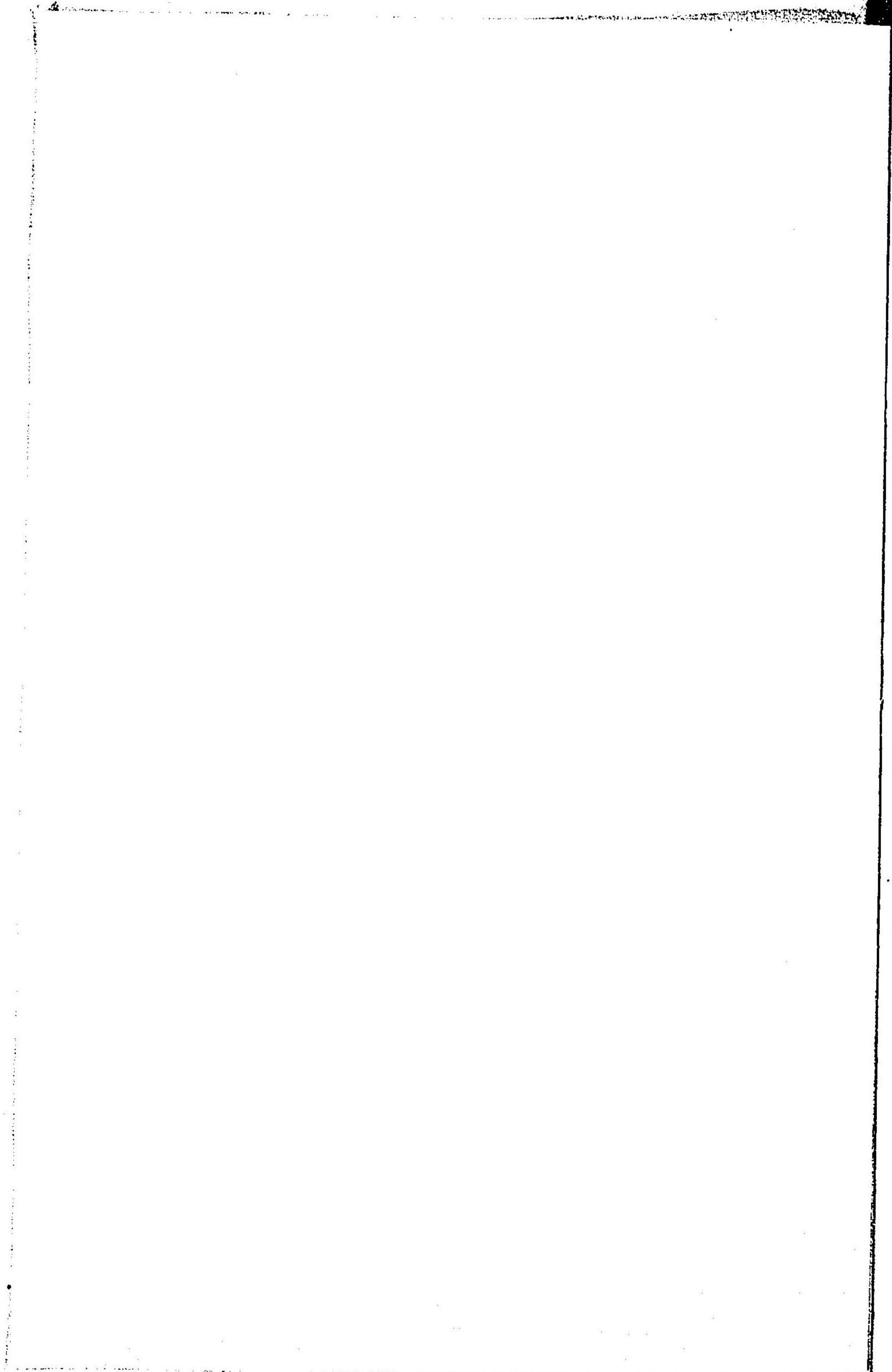
印刷者
 大賣所

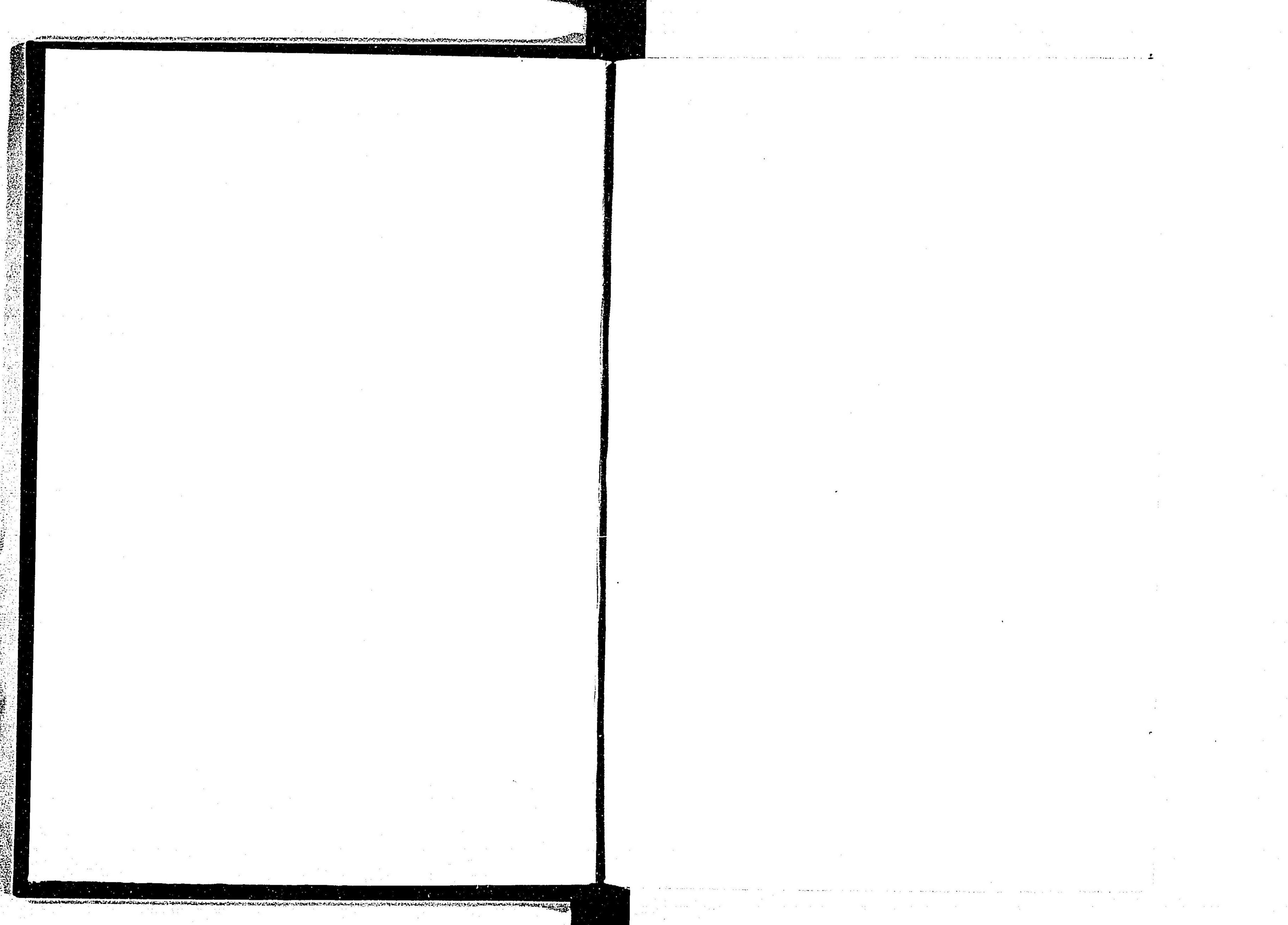


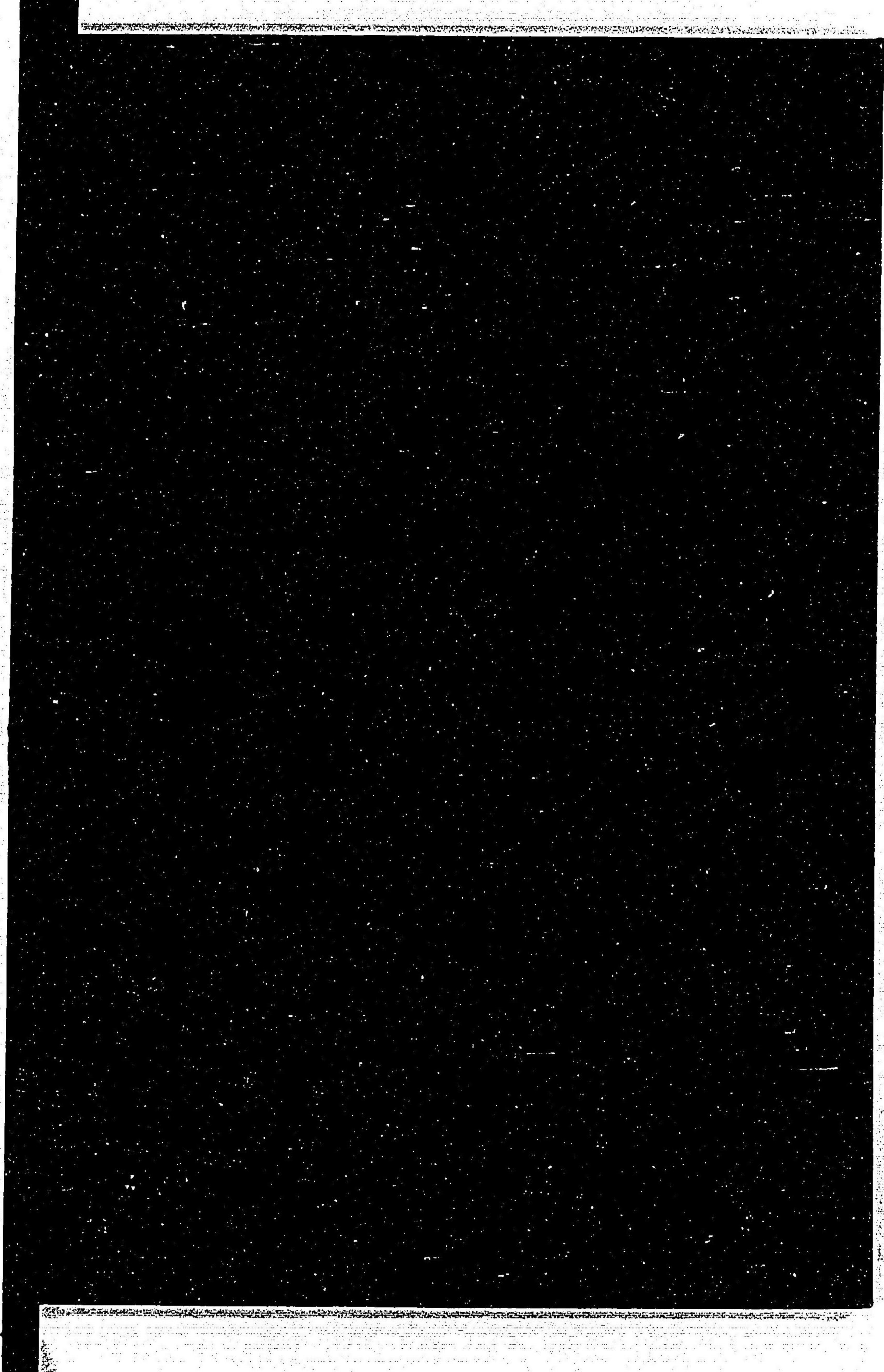
F

#2A96









280.8
H654-k

004238-000-6

280, 8-H654k

今古雅談

堀 誠之 / 著

M25

ACE-0616

